

草創期の北朝鮮における言語政策と辞典編纂

コ・ヨンジン

1. はじめに

1. 1 本稿は、独立直後の1945年8月から『チョソンマル サジョン조선말 사전 (朝鮮語辞典)』が刊行された1962年までの北朝鮮で行なわれた言語政策を概観しつつ、それと辞典編纂との関連性について、及びそれが持つ意義について、検討したものである。我々が特にこの時期の北朝鮮の言語政策を検討しようとするのは、当時北朝鮮で行なわれていた様々な試みが現在の北朝鮮の言語政策の基盤を成していると考えからである。二、三例を挙げるならば、今日の北朝鮮の「語彙整理事業」と「文化語」は朝鮮戦争の後に始まった「言語浄化事業」を受け継いでいたこと、また1960年代後半と1970年の初め頃に出された『ヒョンデチョソンマルサジョン현대조선말사전 (現代朝鮮語辞典)』(第1版)や『チョソンムンファオサジョン조선문화어사전 (朝鮮文化語辞典)』も、1962年に刊行された『朝鮮語辞典』の抱える問題点を克服しようとする試みの一つであったこと、などを指摘できるのである。

北朝鮮で行なわれた言語政策は、概括すると、「文盲退治 漢字廃止 綴字法整備 規範文法及び辞典の編纂 文化語の確立」という順序で進行したと思われる。もちろんこのような政策は一つ一つが個別的になされたというよりは、ある部分ではお互いに重なりながら、ある部分では一つの政策の完結が他の政策を呼びおこしたという点で相互に深い関連を持って行われたものとして見る事が可能である。例えば、漢字の廃止は、文盲退治の結果として新たに読み書きを身につけた人々が誕生したことを念頭におかずには考えられない。また「文化語」の登場にしても、漢字の廃止によって生じた数多くの同音異義語や一目では理解できない難しい漢字語を前提にせずには理

解し難いことである。¹ したがって草創期に北朝鮮で行なわれた言語政策と辞典編纂の過程を検討してみることは、今日の北朝鮮の言語政策の淵源を探ることにとどまらず、それ自体が持つ意義も少なくないと考えられる。

1.2 周知の通り、言語政策とは国家権力が当該社会内部の言語的コミュニケーションの過程に介入する現象とその構造的因果性との両者を指すものである(김하수^{キム・ハス} 1990:142)。そのために韓国のような市民社会では「個人の言語意識」が重視されるが、北朝鮮のように階級革命が進められた、あるいは進められている社会では「人民の集団的言語意識」とその政治社会的発現と言われている「党の意志」に大きな比重が置かれる(김하수^{キム・ハス} 1990:142)。これは辞典編纂の場合も例外ではない。韓国では辞典が「情報疎通という社会文化的必要に応じて製作され流通過程を通じて消費される商品」として考えられるのに比べ、北朝鮮では辞典が政府機関によって編纂・配布されるものであるがゆえに(박금자^{パク・クムジャ} 1989:179-180)、その成功の程度は「党の意志」の反映度合いを基準として判断されることになる。

1.3 ここで本論に先立ち、我々はまず、北朝鮮を研究する場合にいかなる態度でそこに接近するかという問題を考えておくことにしたい。というのも、従来、北朝鮮に対する盲目的な非難に留まる研究があまりにも多かったからである。これに対して筆者は特に北朝鮮のような社会主義社会の場合にはいわゆる「内在的批判的方法」を利用することが大事であるという点をまず強調したい。すなわち、研究対象となる社会や集団の内在的作動論理(理念)を理解し、その現実整合性と理論・実践的特質、さらに限界までを明らかにする必要があるということである。² このような視点が欠ける場合には、今までのように北朝鮮に対する盲目的な非難以外には何も残らないことになる。

今まで北朝鮮の言語政策、とりわけその辞典編纂に関しての韓国における議論は、このような側面についてほとんど考慮せずになされてきたと言っても過言ではない。そして辞典編纂の年代記的整理に留まったり(조재수^{チヨ・チエス} 1986)、韓国で常識化されていることがらをあたかも普遍性を備えたことが

らであるかのようにみなし、そこから北朝鮮の辞典を南北朝鮮の「言語異質化」と関連させながら批判するという傾向が目立った。³ そうではない場合であっても、北朝鮮の辞典の内的構造のみに注目し、言語政策への目配りを欠いたものが多かった。⁴ このように、北朝鮮の辞典編纂を言語政策と直接関連させながら議論する研究はほとんど存在しないと言えるであろう。

したがって本稿で筆者は、北朝鮮の辞典がいかなる意図で、いかなる目的を持って編纂されたか、そしてそれは北朝鮮の言語政策とどのような関係を持っているのかを中心として議論を進めることにしたい。

2. 独立直後の辞典編纂の試み

2. 1 一般に北朝鮮の歴史の時期を区分する場合には、独立直後から「北朝鮮人民委員会」が結成される1947年2月までを「反帝・反封建革命」の時期として、また「北朝鮮人民委員会」の成立から朝鮮戦争が終わる1953年7月までを「社会主義への移行段階」とみなしている。⁵

まず、「反帝・反封建革命」ということばが示している通り、独立直後の北朝鮮で最も先に着手されたのは、植民残滓の清算と土地改革であった。しかし、当時の北朝鮮はこのような政治や経済の問題だけではなく、文化についても深く考慮していたことを、後に北朝鮮の憲法の基礎となったと言われている（都興烈・丁世鉉1989:418）金日成の『二十箇条政治綱領』（1946年3月23日発表）は物語っている。この『二十箇条政治綱領』は「全体の人民の利益や希望を実現する能力を持つ真の民主主義的政府になる」ために必要とされる内容を二十箇条に提示したものである。その内容は「朝鮮の政治経済生活で過去の日本統治の残余を徹底的に肅清すること」（第1条）を筆頭とする植民残滓の清算と関連の諸項目、そして「大企業、運輸機関、銀行、鉱山、森林を国有化すること」（第9条）をはじめとする経済と関連した項目が中心ではある。しかし、「民族文化、科学及び技術を全面的に発展させ劇場、図書館、ラジオ放送局及び映画館の数を拡大すること」（第17条）などのように、広い意味で明らかに文化と関連した内容も含まれている（キム・イルソン 김일성 1949:21-24）。これについて北朝鮮の言語学者らは次のように述べて

いる。

朝鮮民族の偉大な恩師であり、親近なる友の金日成將軍様!

文化が政治・経済と共に富強な祖国建設において三大問題の一つであるということは、既に貴方が二十箇条政治綱領ではっきり、また詳しく指摘されたとおりです。そして文化が言語という器に入れられることにより、それが文化発展に巨大な役割をするだけでなく、人民と人民を繋ぎ、固着させる強力な手段にもなるということも、貴方が常時私たちに教えてくださった教訓でした。(朝鮮語文研究会専門研究委員一同1949:4)

すなわち、「文化は言語という器に入れられることによって文化発展に大きな役割をする」ため、言い換えれば「言語が人間の交際の最も適切な手段であり、革命的思想の先導者」(朝鮮語文研究会専門研究委員一同1949:4)になるために「反帝・反封建革命」の過程で言語は最も重要な役割をするということである。⁶

2.2 このような趣旨で北朝鮮の言語学者らが1946年7月に「北朝鮮人民委員会」教育局の後援を得て、独立直後に混乱した語文の整理と指導を目指して作った機関が「朝鮮語文研究会」であった(編集部1949:135)。しかし「それは民間自由団体であったため強力な組織となることができず、よって素晴らしい成果を上げることができなくなり」⁷「その強化の必要を感じて、1947年2月に北朝鮮人民委員会決定第175号でこれを改編して金日成大学にその本部をおき、シン・クヒョン(신구현)委員長の指導のもとに文法、綴字法、横書き、漢字処理などの諸問題を研究していた」のである(編集部1949:135)。

1948年9月9日に朝鮮民主主義人民共和国が樹立されると、朝鮮語文研究会はまた教育省の傘下機関となり、その主要な事業として朝鮮語文法と朝鮮語辞典の編纂を公式に担当するようになる。これは次のような資料から確認できる。

朝鮮民主主義人民共和国が樹立され、我が民族の英雄金日成将軍を首班とする中央政府が祖国統一のために万全の施策を着々と実践に移すようになった1948年10月2日、内閣第四次閣議において

朝鮮語文の統一と発展のための研究事業を一層強化推進するために北朝鮮人民委員会決定第175号を廃止し教育省内に朝鮮語文研究会を設置し専門委員会を組織するために、その組織責任を李克魯無任所相に委任することと、1949年12月の末日までに朝鮮語文法と朝鮮語辞典を公刊することを決定した。(編集部1949:134)

かくして政府の公式機関となった朝鮮語文研究会は、朝鮮語の標準文法の制定と辞典編纂を当面の任務とすることとなった。第一の問題である文法の編纂に関しては、南北を通じて朝鮮語文の統一の基本となる重要かつ緊急な問題である標準文法が制定されていないため、それを制定するために文法編修部と分科委員会をおくと説明している。そして第二の問題である辞典編纂と関連して、規範文法と綴字法、標準語、外来語、そして学術用語などがまだ整備されていない上に、植民地時代の遺産である日本式用語の修正など、辞典編纂に先立って解決しなければならない問題が山積になっていた。このような問題を解決するために、朝鮮語文研究会では専任編纂員と専門委員をはじめとする学界の権威らが分担して「文化の総合大学であり、かつ語文の最高法廷」である辞典を編纂するために「全精力と才能を尽くして」この事業を推進していると語っている。⁷

かくして朝鮮語文研究会は、綴字法及び規範文法、そして辞典の編纂に本格的に着手したが、その結果はまず1948年に「朝鮮語新綴字法」として正式に現れた。⁸ そして続いて1949年12月には朝鮮語文研究会の名義で『朝鮮語文法』が公式に刊行され、辞典編纂も軌道に乗り、予定していた1949年12月の末にはその原稿が完成したという。

そして我々はマルクス・レーニン主義的な世界観に基づいて注釈された『朝鮮語辞典』の編纂という膨大な事業を完遂し既に印刷に回附

した。また新しい言語理論に立脚して、朝鮮語新綴字法を基にする『朝鮮語文法』の編修事業を完遂し、我が語文研究会内の文法編修分科委員会及び専門研究委員会で慎重に討議した結果、これを採択し公刊した。⁹

しかし辞典の場合は上で見たとおり、原稿は完成されたが、惜しいことにまもなく勃発した朝鮮戦争により印刷が中断され、辞典の編纂は戦争が終わった後の1956年を待たなければならなかった。

2.3 ならば、我々はここで何故に当時北朝鮮は規範文法と辞典の編纂をそのように急いでいたのかという問題を検討してみる必要があるだろう。これについてはまず次のことばに注目して欲しい。

我が共和国の中央政府が昨年9月に樹立されるとすぐ、10月に朝鮮語文研究会を再組織することを内閣が決定し、この研究会に朝鮮語文法と辞典を今年中に完成することを指示しました。この決定は単に朝鮮語学史上においてのみならず、我が祖国が自主独立国家に統一されるためにも非常に大きな意義を持つことです。何故かという、我が民族は単一民族で構成されており、また単一言語を使用する民族であるにもかかわらず、いまだに三千万同胞が完全に統一された言語、完全に統一された文字を持っていないためであります。すなわち、いまでも私たちには完全に統一された民族共通語が形成されていないということです。(김수경 1949:140)

当時、南北を問わず統一された民族共通語が事実上なかったということは周知のとおりである。これには色々な理由があるであろうが、何よりも大きな理由は、朝鮮が近代的な民族国家の形成に失敗し植民地に堕してしまっただ点にある。すなわち、「長い間の封建的分散性と日帝の野蛮的弾圧の下で真の統一国家を私たちは過去に持つことができなかった」のであり、「したがって過去には私たちの言語と文字が統一される何らの社会的基礎もなかつ

た」ためである (キム・スギョン 김수경 1949:140)

それゆえ植民地状態から脱し、独立国家が樹立された上に、「反帝・反封建革命」が行われて社会主義への建設が力強く進められている状況下において、ようやく、統一した民族共通語の樹立はもはや先送りにすることのできない課題として浮上することが可能になったのである。これについて北朝鮮では次のように言う。

しかし今日朝鮮人民の統一した意思を代弁する中央政府が樹立された段階においては、民族共通語が最終的に完成される歴史的必然性を我々は持つようになりました。内閣決定書に明示されている通り、「朝鮮語文の統一と発展」のためにその最初の事業として文法と辞典を編纂することは、我が民族がより一層強固な単一民族に統一されるために必ず完遂しなくてはならない課題です。……統一された言語と文字 - これは真の民族統一の基準となるものであります。(キム・スギョン 김수경 1949:140-141)

このように統一された言語と文字こそ真の民族統一になくてはならない要素という理由として、北朝鮮ではスターリンとレーニンの表現を借りて「言語は発展と闘争の道具」であり、かつ「人間交際の最も重要な手段」であるためと述べられるのである (キム・スギョン 김수경 1949:141)。ところが、このような言語の規範化のためにはまず綴字法が整えられなければならず、国家機関がその綴字法を公式に編纂するか、もしくは国家の認知する規範文法が必要となり、またこのような綴字法と規範文法に基づいた辞典が必要となるのである。

しかし当時は、これらのうちの何一つとして整理されていないという状況であった。植民統治の下で朝鮮語学会により制定・公布された「ハングル綴字法統一案」があることはあったが、それは極端に言えば民間学術団体による一種の宣言に過ぎなかったため、守っても守らなくても良い非常に不完全な規範であった。もちろん韓国の場合、「1948年8月15日に大韓民国政府が樹立されると、政府は国家の公用文書はもちろん、国定教科書などにも『ハングル綴字法統一案』をそのまま採択することにした」(ハングル学会50周

年記念事業会編1971:336) という表現からも分かるように、「統一案」がある程度までは規範の役割をしたことは事実である。しかし、まもなく発生する「ハングル・ショック (波動^{バドン})」で見られるようにそれは韓国でも確固たるものではなかった。そして、北朝鮮の場合にも「ハングル綴字法統一案」に基づいた^{キル・ヨンジン}길용진 (1947)をはじめ、1948年に制定された「朝鮮語新綴字法」があることはあったが、それが全面的に実施された形跡はない。これと関連して当時北朝鮮の言語状況を示している非常に興味ぶかい記録があるが、その中からいくつかを取り上げて見ることにしよう。¹⁰

(1) 「감다」「가라왔다」「감작같다」の「ㄱ」(k)音を必ず「ㄱ」(k')音に出したのを見ると、教科書を著した人は特殊な自分の地方の発音を普遍的なことばであると誤って認識しており、「바둑」を「바두기」に、「삶」を「살기」にしたことと、助詞「가」を使ったことを見ると、これは咸鏡北道訛りの「이가」助詞をよく使う習慣から犯した誤りであり、…… (63-64ページ)

(2) 61課の「메가흥」はもとの音が「메가풍」であり、ロシア語の発音にも「풍」があるのに日本語の発音の影響で「흥」になって世界共通性を失ってしまった。また朝鮮語ではまだ人民に普及されていないので「메가풍」を教えるのが正しい。(64ページ)

(3) 61課の「소새끼」も乱暴な言い方では使う場合がある。しかし子供たちには簡単で正確な表現を教える必要がある。国語教科書では「송아지」または「소새끼」ということばの方が良い。表現が複雑で不正確でありかつ規則のない乱暴な「송아지 새끼」ということばは使わない方が良い。「송아지 새끼」は「송아지의 새끼」という意味になる。(65ページ)

(4) 3課の「꿈바인이 짐을 부리우고 또 일을 계속합니다」(コンバインが荷物を降ろしまた仕事を続けます)という表現にあ

る「부리우」は語法と文法が共によくないことばである。「부리우」は他動詞の受身型である。何が降ろされたのか。降ろされたのは「荷物」である。それなら「짐을 부리우고」ではなく「짐이 부리우고」にしてはじめて文法に合う表現になるのである。(67ページ)

既述のように、当時は植民地から独立したばかりであったということもあり、事実上南北を問わず統一された共通語は存在していなかった。とりわけ上の引用文に見られるように、独立直後の北朝鮮では甚だしくは教科書にまでも方言的な要素はもちろんのこと、日本語の残滓まで掲載されており、言語の統一とは程遠かった。このような状況、換言すれば、言語的統一が成されていない状況で、人民を統合し「民族的独立を強固にして革命と建設を果的に成し遂げていき」、「搾取と圧迫、無知と蒙昧の中で悲惨な生活を強要されてきた人民を新しい社会の真の主人にし、豊かで文明的な生活の享有者にする」(チョン・ヘジョン 전혜정 1987:3) ことはほとんど不可能である。そのために北朝鮮はこのような問題を解決しようと考え、前でも見たように、朝鮮語文研究会を通じてこの三種類の事業、つまり綴字法や規範文法、そして辞典編纂を急いだのである。

2.4 しかれば、この段階で必要な文法とは、どのようなものでなければならぬのかという問題が必然的に現れるが、これについて彼らは次のように述べている。

しかれば、この段階において文法編修の課業を引き受けた私たちは一体どういう文法を作り出さなければならないのでしょうか？その目標はきわめて簡単で明確です。すなわち朝鮮人民が統一された文字生活をする事ができるように、また今後も言語と文字生活において朝鮮人民が無限の発展の可能性を持つことができるように、そういう基礎条件をこの文法が必ず立てておくべきであるということです。別の言い方をすれば、私達は自分たちの優秀な言語と文字を持っているのにもかかわらず、未だにその真価を十分に発揮できない状態を素朴に

文法上に反映させるのではなく、いかにすれば元々根本が優秀なこの言語と文字を世界の先進文化民族のそれと肩を並べることができるようにするか、いかにすれば三千万人民がおしなべて統一した言語、同じ文字をいつも間違いなく正しく使えるようにすることができるか - このような観点から文法を編纂すべきです。(キム・スギョン 김수경 1949:141)

換言すれば、この段階で必要な文法とは「朝鮮人民が統一された言語と文字生活をする事ができる」ものにとどまらず、なお一層「これからの言語と文字生活で無限の発展が可能になるようにしなければならない」ということである。そのために「科学は単に世界を説明するのには終わるのではなく、ひいては世界を改造する」のに貢献できるようにし、また「朝鮮語文の統一と発展という当面の実践的課業に合う強力かつ有力な武器になる」文法でなければならないということである(キム・スギョン 김수경 1949:141-142)。

特に北朝鮮で非常に速いスピードで進められたに違いない「反帝・反封建革命」と、「社会主義への移行」の過程で、住民の動員及び彼らの自発的参加は、欠かせない条件であった。そのためには何よりも統一された言語が必要であったことは間違いのないであろうが、その目的は一言で次のように整理できる。

結局文典の必要性は人間の言語生活においてお互いに従わなければならない基本的な法則を立てることにより、人間相互間の集団的交際生活を容易にしてくれるところにあるのである。国土の完全整備と祖国統一のために全ての人民が一様に堅く団結し決起している現段階において、朝鮮語の文典を編纂する意義も一言でいえば文化の宝庫であるという点に照らしてみると、この上なく重大なことである。

辞典の意義、特に注釈辞典の意義を、レーニン先生は文化の宝庫として高く評価し、ソビエト政権の初期に既に教育人民委員会で現代ロシア語(プーシキンからゴーリキーまで)の辞典を作ることを提起した。(シン・クヒョン 신구현 1949:19)

さらに言うならば、このような民族共通語の完成という課題は、朝鮮半島の言語史的な面においても簡単な問題ではなかった。そのために植民地時代から辞典編纂のための努力は続いていたのであり、「朝鮮語学会事件」によりやむを得ず中断した辞典編纂は独立後の韓国で続けられた。そうして1947年10月には『クンサジオン큰사전（大辞典）』の第1巻が出て好評を得るなど、辞典編纂は植民地時代に受けた受難を克服するという象徴的な意味も非常に大きかったのである。しかも植民地時代に朝鮮語学会を実質的に率いた李克魯が「朝鮮語文研究会」の委員長であり、また朝鮮語学会事件で獄死した李允宰の婿で、1956年に『チョソノソサジオン조선어 소사전（朝鮮語小辞典）』が出るまでに北朝鮮で利用されていた辞典（李秉根2000:272）として知られている『ピョジュンマルサジオン표준말 사전（標準語辞典）』の編纂者でもある金炳済も北朝鮮にいた。このような様々な条件が折り重なりながら、独立直後から朝鮮戦争が勃発するまで、辞典編纂も含めて、北朝鮮の言語政策が展開されたのであった。

3．戦後復旧政策と辞典編纂

3.1 1950年6月に始まり約3年間続いた朝鮮戦争は、南北を問わず国土を完全に廃虚にしてしまった。それは喩えようもない悲劇であった。北朝鮮だけでも少なくとも人口の12～15%が殺され、¹¹ 産業面での被害も想像を超えるものであった。これに関して朝鮮戦争による具体的な北朝鮮の被害状況は次のように述べられている。

3年余にわたった加熱した戦争で工業部門の被害は特に過酷であった。8千7百余棟の工場製造所の建物や生産設備が破壊された。工業生産で1953年には戦争前の1949年に比べて電力供給は26%に、燃料供給は11%に、冶金工業は10%に、化学工業は23%に各々減少し、また鉄鉱石、銑鉄、鋼鉄、粗銅、粗亜鉛、電動機、変圧器、乳酸、化学肥料、カーバイド、苛性ソーダ、セメントなどの生産施設は完全に破壊された。

農業部門の被害も莫大であった。膨大な利益を収める面積を持って

いた灌漑施設、河川堤防の破壊や農地に対する野蛮な爆撃によって37万町歩の農地が被害を受け、9万町歩の農耕地が減少した。また25万頭の牛と38万頭の豚が被害を受け、また9万本の果樹が爆撃によって失われた。1953年には1949年に比べて穀類生産は88%に減少し、また綿花とタバコは各々23%、果実は72%、蚕糸の元である繭の生産は58%に減少した。

戦争により運輸、通信部門が受けた被害も甚大であり、都市と労働者区で被った被害は特に残酷であった。2千8百万平方メートルの住宅、5千余ヶ所の学校、千余ヶ所の病院及び診療所、260余ヶ所の劇場及び映画館と数千ヶ所の文化厚生施設が破壊され、共和国の都市は灰の山と化した。¹²

このように「都市と農村は灰の山と化し、人民経済のあらゆる部門が余地なく破壊」され、「人民は生活の土台さえほとんどなくなってしまい、彼らには食べ物も着るものも非常に足りない」状況で、「戦後復旧建設を何からどのようにすればよいのか全く分からないほど」北朝鮮の事情は深刻であった。¹³ 事情がこうであったために北朝鮮は何と言っても戦争による被害を復旧することに全力を傾けなければならなかった。そして戦争が終わった直後の1953年8月に招集された党中央委員会第6次全員会議で、金日成は「あらゆるものを戦後人民経済復旧発展のために」という報告をするが、そこで彼は次のように言っている。

停戦協定が調印されることにより、我が国と我が人民は戦争状態から平和的復旧建設時期に入るようになりました。

我が党と共和国政府の前には、戦争によって破壊された人民経済を復旧発展させることと、零落した人民生活を安定向上させなければならない重要な課業が提示されています。

我が国の統一独立を達成するにあたって最も重要なことは、共和国の北半部（北側）に樹立された人民民主主義制度をより一層強化し、人民大衆の愛国的力量を動員して民主基地を政治・経済・軍事的にさ

らに強固にすることです。このようにしてこそ我が祖国の統一が保障され、我が国における人民民主主義革命を完成することができます。したがって我が党と全ての人民は停戦という平和的な期間を最大限に利用し民主基地の強化のための戦後復旧建設にあらゆる力を動員するべきです。(김일성^{キム・イルソン} 1997:23-24)

「民主基地」とは、本来民主革命が進められている国で、ある地域を確保した場合、その地域に革命政権を樹立し民主改革を実施することによって、そこを全国的な民主革命を遂行するための基地とするという意味である(金順圭1991:244)。したがって北朝鮮の立場からすれば、戦争によって国土のあらゆる部門が廃虚になったとは言え、相変らず朝鮮北部という「国土」の半分を「全朝鮮の愛国民民主力量が結集して樹立した人民政権」¹⁴が掌握している限り、それを復旧し「民主基地」とすることが最も重要な意味を持つことになる。また金日成は次のように言う。

民主基地を強化するための闘争 - これは祖国統一を保障するための重要な課業です。民主基地の強化に関するスローガンは我が祖国が統一される時までずっと維持しなければなりません。我々にはより一層強大な民主基地が必要です。より一層強大な軍隊、より一層強力な党、より一層強靱な経済力が私たちには必要です。これがあってこそ我々は革命力量と革命氣勢を正しく把握し、積極的に問題を解決することができます。民主基地の強化と祖国統一はお互いに密接に繋がっており、不可分な関係にあります。¹⁵

問題は戦後復旧の方向であったが、この過程で北朝鮮には二つの流れがあった。ひとつは重工業優先の方針を主張する側であり、もうひとつは軽工業優先を主張する側であったが、金日成は前者の代表であった。1953年8月の党中央委員会6次全会会議は、論議沸騰の末に「重工業の優先的成長を保障しながら同時に戦争により零落した人民生活を向上させるため軽工業と農業を急速に発展させる」という政策を戦後の北朝鮮経済復旧建設の基本路線と

して確定した。¹⁶ そして戦時の「全てを戦争の勝利のために!」というスローガンから「あらゆるものを戦後人民経済復旧発展のために!」というスローガンに変え、「民主基地」の強化に力を入れる政策が施行されるようになったのである(金順圭1991:240-1)。

しかし、戦争による廃虚の中で、限られた資源のみを持って戦後復旧建設をしなければならなかった北朝鮮での重工業優先の政策は、別の観点から見ると、戦争によって衣食住生活が極端に疲弊していた北朝鮮の住民に「未来の豊饒と自立のために今日の貧窮は耐えなければならない」という、苦しい忍耐を要求する政策でもあった(이중석^{イ・チュンソク} 2000:75)。それゆえ何よりもまず必要であったことは、人民を説得し教育することであった。そうして「現在我が国の社会主義建設で最も重要な課業として提起されている技術革命及び文化革命と切り離しては考えられない」「共産主義教養事業」を通じて、「勤労者たちの技術水準と文化水準を高めることによってのみ彼らをより一層速く、そしてより徹底的に共産主義思想に武装させていく」¹⁷ための事業が本格的に始まるのである。これと共に「文化革命と技術革命を成果的に推進するためには中等義務教育と技術義務教育を実施し、勤労者を広範な通信教育網で網羅する一方、広範な勤労者らの中に勤労者学校や勤労者中学校を設置・運営すると同時に、体育・文学・芸術クルーシヨック、¹⁸ 技術クルーシヨックなどの各種クルーシヨックを広く組織することにより数年の内に全体勤労者が人民学校または初級中学校卒業程度以上の知識を持つようにし、彼らが皆一定の技術を持った文明化した上で多方面に発展した社会主義建設者になるようにする」(『朝鮮語文』1959年1号、9ページ)ための努力が払われたのであった。このようにあらゆる事業を推進していくために必ず必要とされたのがまさに言語であったのである。これについて北朝鮮の学者らは次のように言う。

ところがこれらのすべての事業が言語を通じて行われるということを特に強調しなければならない。元々言語は民族文化の形式であり新しい技術習得のための手段であるがゆえに、急速に社会主義文化を建設し技術革命を成果的に成し遂げるためには朝鮮語自体をその要求に

つりあうように発展させなければならない。

その為に最も重要な問題は、我々が使っていることばと文字を広範な人民大衆の要求に最大限度に符合させる問題である。……のみならず我々のことばと文字を広範な勤労大衆の要求に符合させるということは、勤労者らの中に共産主義教養事業を成果的に展開するためにも切実に必要である。(『朝鮮語文』1959年1号、9ページ)

さらに「広範な勤労者たちを共産主義思想に感化し、彼らの技術及び文化水準を高めるために」、「個別談話、座談会、講演会、質疑応答、報告会、経験交換会、有線放送、ラジオ放送などと共に、党の広報や社会団体の新聞をはじめとする各種新聞、工場新聞、壁新聞、張り紙などの各種宣伝煽動手段」など、北朝鮮では動員できるあらゆる手段を全て動員しなければならなかった。そして「このような宣伝煽動手段が自分の使命を十分達成するためには、言語が広範な人民大衆のものになる」(『朝鮮語文』1959年1号、9ページ) 必要があったのである。

このような方向で朝鮮戦争後の北朝鮮の言語政策は行われていくのであるが、もちろん辞典編纂の目的もこれと直接関わっていた。言い換えれば、北朝鮮が辞典編纂を含む言語政策の分野で最も力を入れたのは、戦後の窮乏した状況に耐えて、戦争で完全に廃虚になった国土を復旧することに熱情的に参加するように人民を説得するためであった、ということである。これと関連して何よりも先に提起されるのは、相変わらず規範化とは遠い状態にある朝鮮語をいかに規範化するかという問題であった。当時、実に驚くべきことに、綴字法の規範すらも整っていないのであった。そこで、戦争が終わった直後の1954年に、まず朝鮮語学会の「ハングル綴字法統一案」を部分的に修正して使っていた綴字法規範を『朝鮮語綴字法』として統合して制定・公布した。そして、比較的時間のかかる規範文法や辞典の編纂も進められるようになり、1960年には『朝鮮語文法1(音韻論・形態論)』が、そしてまた1962年11月には6巻からなる『朝鮮語辞典』が、相次いで刊行され、かくして草創期の言語政策は一段落することになったのである。

3.2 ところで、この過程で最初に克服されなければならなかったのは、言語の不統一による混乱と、コミュニケーションの障害であった。これは既に論じたように、甚だしくは政府機関が編纂した教科書にまで方言的要素が含まれていたことなどからして、容易に推測されるであろう。そのため、戦後復旧を成功させるためには先ず言語の不統一による混乱を防ぐ必要があったのである。すなわち、「共和国の北半部での社会主義の建設は、大衆啓蒙事業を一層強化することを要求している。大衆の文化啓蒙事業を進行するに当たって言語が持つ教養的かつ認識的意義は非常に大きい。思惟と直接結びついている言語は交際及び思想交換の強力で有力な武器である。数千年にわたる人民の認識活動が集中している言語を研究しながら、我々は自らの思惟を発展させ、自らの知識を豊かにし、自らの精神的能力を研磨する。母国語の表現的手段を正確に、また積極的に所有することは、社会活動のあらゆる部門で成果的作業のための必要な条件となる」(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ) ために、「母国語に対する科学的研究とその規範化のための事業を一層強化し、広範な人民大衆の中に言語に関する知識を積極的に普及」(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ) する必要があるということである。これに関して北朝鮮では、具体的に次のように語られている。

現代朝鮮語を完全に規範化する問題 - これは現在私たち朝鮮言語学徒らの前に提起されている基本課題である。朝鮮言語学が現代朝鮮語の規範化の目的を達成するためにはまずマルクス主義・ソビエト言語学にしっかり立脚し、同時に各国の先進言語理論を主体性を持って幅広く摂取しながら、具体的な朝鮮語の資料をその歴史的発展の中で把握・分析することに中心をおくべきである。(ソン・ソリョン 송서룡 1957:19)

そのために「民族語の規範化と豊富化のための方法に関する問題は、当然全朝鮮語文学徒の考慮と研究の中心とならざる」(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ) を得ないのであり、「そのために言語学者らは朝鮮語を一層規範化するために切実に要求される現実的な問題に関する優先的研究を進行し、『朝鮮語中辞典』、『朝鮮語規範文法』などの完成に全力を尽くさなければ」

(『朝鮮語文』1957年6号、4ページ)ならなかったのである。すなわち、規範文法と辞典編纂は社会主義社会の建設になくしてはならない要素として受け取られたのである。これは次のような彼らの発言からも確認されることである。

.....その単語の意味確定とその正確な使用のために、科学的な注釈辞典や規範文法は一日も早く出さなければならない。社会主義建設のために千里馬に乗って建設に拍車をかけているこの時に、自分の美しい母国語を正確に使用する問題は、社会主義的文化革命の重要な糸口のひとつである。(『朝鮮語文』1958年5号、12ページ)

のみならず、「朝鮮語文法の構造に関する研究、朝鮮語語彙論の研究や辞典編纂に関する理論的研究などと共に、朝鮮語の歴史の体系化のために切実に要望される一連の課題、例えば朝鮮民族語の形成とその発展に関する研究、朝鮮語の内的発達法則の研究、朝鮮語の方言区画とその特性に関する研究、朝鮮語と隣接した言語との関係に関する研究」(『朝鮮語文』1958年5号、13ページ)をはじめとする、「現代朝鮮語の規範化のためにきわめて重要な意義を持つ一連の研究課題」(『朝鮮語文』1958年5号、13ページ)も朝鮮の語文学者が解決しなければならなかった問題であった。

3.3 しかし、このような語彙の規範化だけでは、当時の北朝鮮では解決出来ない問題があまりにも多かった。すなわち、独立直後から幅広く行われた「文盲退治事業」を通じて数百万に達する文盲をなくしたとは言え、彼らはせいぜいハンゲルで簡単な読み書きができる程度に過ぎず、高度に抽象的な概念や社会主義社会の建設に必須とも言うべき政治用語などを理解するには、相変わらず程遠かった。特に、資本主義社会から社会主義社会への移行は上部構造の変革が先行するため、このような上部構造の変革は社会構成員の大多数を占めている無産大衆が変革の主体としての意識の転換を成し遂げ、政治的革命を達成することによって一次的に完成される(김하수^{キム・ハス} 1990:143) という点を勘案すると、大衆教育の必要性は何よりも重要であっ

たに違いないであろう。このような過程で封建時代から植民地時代を経て、より一層増えた難しい漢字語や日本式漢字語をそのままにしては大衆教育は文字通り「木に縁りて魚を求むる」に過ぎなかった。すなわち、一部のエリートしか理解できない難しい語彙をそのまま放置した状態では、大衆の動員はもちろん、彼らを教育することすらできなくなるのである。ここに登場するのがまさに「言語浄化事業」であった。

もちろんこれはこの時初めて試みられたわけではない。独立直後にもこれと似た発言はあったのである。しかし当時は「言語浄化事業」ということばも使っていなかった上に、「人民性の欠如」を批判することが主な内容であったという点で、若干の差がある。つまり、独立直後の観点は「反帝・反封建革命」の一環として「封建的・日帝的残滓を肅清」することにより大きな目的があったのに対し、朝鮮戦争の後においてはそうした側面を完全に無視はしていないものの、「母国語の規範化のために人民に分かりにくい漢字語や必要以上の外来語の使用をなくす」ことにその目的があったのである。これは次の文章でさらにはっきり確認することができる。

今日党と政府が私たち科学労働者の前に提起している重要な課業のひとつは、科学研究事業を人民と現実いかに接近させるかという問題である。私たち科学者らが社会主義建設に積極的に貢献するためには当然人民の生活と大衆の創造的活動とを分離して考えることはできない。この点で我が言語文学研究所¹⁹は母国語の規範化を自分の課業の一つとしてみなしているだけに、広範な人民大衆の中に入って彼らに言語に関する知識を普及し、彼らが正確な言語の所有者になるようにするために、人民により一層接近しなければならない。

我々の言語行為の中には日帝の残滓が未だに残っており、人民に分かりにくい漢字語の使用、必要以上の外来語の使用など、正しくない傾向をなくすために言語浄化事業は党的次元での重要な課業になっている。かつて金日成同志は大衆が分かりやすいことばを使い、大衆が願う文章を書けと教えた。我々はこの教示に従い、去る時期にも一定の成果を上げたが、これは初歩的な成果に過ぎない。(『朝鮮語文』

1958年5号、11-12ページ)

上の引用文にも見られるのだが、朝鮮戦争以後の「言語浄化事業」とは「全体朝鮮人民が社会主義建設に総決起している」(『朝鮮語文』1959年1号、3ページ)現状で、「母国語に対する科学的研究とその規範化のための事業を一層強化し広範な人民大衆の中に言語に関する知識を積極的に普及」(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ)するための政策という意味で、独立直後のそれとは異なる。すなわち、「現在科学院言語文学研究所が進行している『朝鮮語規範文法』、『朝鮮語中辞典』、言語浄化のための問題の成果的保障は、広範な人民大衆の文化啓蒙事業に大きな助けになる」(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ)ためであるということである。「のみならず我がことばと文字を広範な勤労大衆の要求に合わせることは、勤労者らの中に共産主義教養事業を成果的に展開するためにも切実に必要である」(『朝鮮語文』1959年1号、9ページ)ということである。

今まで見てきたように、「共産主義教養事業」は基本的に言語を通じて推進されることであるがゆえに、「広範な人民大衆の中に言語に関する知識を積極的に普及する」のはもちろんのこと、「党と大衆を結ぶ重要な手段であり、党が提示した政治、経済、文化建設の課業を実践するために勤労大衆を組織・動員する強力な武器である出版物事業の改善」も必須であった(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ)。そのためには「勤労大衆を出版事業に積極的に参加させ、その内容と形式を大衆の水準と要求に合うようにし、文体の簡潔、正確、明瞭性を保障し、人民大衆が読んですぐ理解できる通俗的な出版物に改変」しなければならないのである(『朝鮮語文』1956年3号、7ページ)。

「言語浄化事業」はまさにこのような必要から始まったものであり、一部の学者に対してだけではなく、全人民に向けて行われたことに我々はあらためて注意する必要がある。

特に共和国の北半部では社会主義を建設し社会主義的文化革命を遂行する過程において、この言語浄化事業を全人民的な運動の一つとし

て展開することを提示した。私たち言語学者らは党の呼び掛けに応じ、言語浄化事業と関連した諸般理論的及び実践的問題を研究・解決しながら、出版報道部門、生産部門など直接人民の言語生活に深く入り、数多くの論説や座談会、講演会などを組織した。かくして今日朝鮮人民の実際の言語生活には次第に大きな変革が起こりつつ、分かりにくい漢字や必要ではない外来語に反対する闘争が力強く展開されている。(『朝鮮語文』1958年5号、7ページ)

そうして「各大学をはじめとするすべての学校、出版報道、文化機関などの言語学関係の労働者と研究所の科学労働者の間に座談会が進行」され、「これから書かれる朝鮮語の規範文法の体系をいかに統一するか、言語浄化運動はいかに効果的に展開するかについて真摯な意見交換が行われる」(『朝鮮語文』1958年2号、80ページ)など、「言語浄化事業」はかなり精力的に推進された。なぜなら「言語浄化と学術用語査定事業をより人民大衆に身近なものにするためには語彙と単語造成に関する部分を専門的に研究している学者にのみ任せずに、あらゆる出版報道機関、行政機関、作家芸術家、教員らが一体となり群衆の運動に展開しなくては願うところの成果を上げることはできない」(『朝鮮語文』1958年5号、12ページ)ためである。

3.4 以上のような目的で、北朝鮮は辞典編纂を急いだが、その結果出た最初の辞典は1956年2月に初版が刊行された『^{チョンソク}조선어 소사전 (朝鮮語小辞典)』であった。この『朝鮮語小辞典』を北朝鮮では次のように評価している。

この『朝鮮語小辞典』は現代朝鮮社会の現実的要求に応えながら単語の意味注釈をマルクス・レーニン主義の哲学に基づいて正当にし、また科学的であると同時に全人民的な利害関係を正確に反映するために努力した。単語の収録においても現代朝鮮語の標準語の状態をできるだけ完全に、そして正確に反映しながらも、特に8・15独立以後に全人民に広く使われるようになった単語と表現を広範に収録した。の

みならず、最近になって語彙構成から抜け出した消極的で古い単語、例えば使用頻度が極めて低く、それに当たる固有朝鮮語の単語の生産的な使用によって既に消極的な語彙になった数多くの漢字語彙や古語をはじめ、地域的な方言的な性格を持つ単語、各種通用語、特殊な専門用語、個人的あるいは一地方的色彩が濃厚な擬声-擬態語らは収録しなかった。これと共にこの辞典は現代朝鮮標準語の正確な使用、その形態の正確な造成、正しい発音、また正確な表記に関する問題にも多大な力を入れた。……特にこの辞典を編纂するに当たって語彙の選択、単語の形態論的特性の表示、語源の表示、単語の意味注釈、その発音の表示、綴字法や外来語の表記、用例などにおいて我が国の辞典編纂の民族的伝統の優秀な点を継承しながらも、現代先進言語科学の経験を数多く導入することにも努めた。(辞典研究室1958:32)

このような『朝鮮語小辞典』は「朝鮮人民の言語生活の規範化、ひいては朝鮮人民の文化創造生活で一定の役割をすることは疑問の余地のない」(『朝鮮語小辞典』前書き)と書かれていたが、それに劣らずこの辞書は文字通り「小辞典」であったため、当然限界もあった。それはこの辞典の「前書き」にも「しかしこの『朝鮮語小辞典』には未だ不備な点が多い。したがって全朝鮮の言語学徒はそのさらなる完成のために今後より一層努力しなければならない」と書いていることからもしっかり見てとれる。したがって事実上この辞典は1960年から1962年にかけて刊行された『朝鮮語辞典』が出るまで、臨時的な代用物として利用された性格が濃い。

3.5 1956年に『朝鮮語小辞典』の刊行を終えた科学院言語文学研究所は、朝鮮語中辞典の編纂のために1956年7月からこの仕事に着手し11人で「中辞典編纂委員会」を組織する一方、既成の辞典と文学作品からの語彙の抜粋作業を始めた(『朝鮮語文』1957年2号、82ページ)。そして、1957年の秋からは本格的な編纂が始まり1960年には8・15独立15周年を記念し第1巻が刊行され(辞典研究室1963:1)、1962年11月にはついに辞典編纂が完了した。

この『^{チョソンマル} 조선말 ^{サジョン} 사전 (朝鮮語辞典)』は「現代朝鮮語の語彙構成の中で基本的な部分のみを載せた『朝鮮語小辞典』は、急速な技術文化革命の進展による朝鮮人民の多面的な言語生活の要求を満たすことができないと見て、より規模の大きい、より詳しい辞典が必要」(『朝鮮語辞典』、前書き)になったため編纂したものである。^{キム・スギョン} 김수경 (1963:53)はこの辞典を、「我が国の辞典編纂の歴史上画期的な新しい段階を開き、国際的にも充分自慢することができる水準に到達して」おり、「この辞典の完成によって我が文化の宝物庫に6冊の書籍が新しく寄与されたという事実以外に、言語学の中でも理論・実践的に最も難しい特殊分科のひとつである辞典編纂分野での専門科学者集団が形成・育成されるようになり、また我が社会や言語に相応しい主体性のある辞典編纂理論の土台が作られた」と評価している。この表現からも分かるように、この辞典は「朝鮮人民の歴史かつては見られなかった一大繁栄の時期に入ったこの時、国の技術文化革命に大きく寄与」²⁰するはずであるとの彼らの自負通り、「韓国のハングル学会により編集・刊行された『^{クンサジョン} 큰사전 (大辞典)』と共に我が文化史上大きく評価されるべき貴重な結実」(^{キム・ハス} 김하수 1990:144)であった。

北朝鮮ではこの辞典を「中辞典」といっているが、収録されている語彙の数の面から見ると、ハングル学会により刊行された『^{クンサジョン} 큰사전 (大辞典)』の164,125単語より、むしろ23,012個多い187,137単語が載せられているため、「大辞典」と言っても決して言い過ぎでない。このように収録語彙の数が多くなったのは「現代朝鮮語の発展において重要な意義を持つ19世紀末の『言文一致運動』の時期から今日に至るまでの現代朝鮮語の語彙構成の状態を比較的詳細に示す」ために、そして「朝鮮人民が日帝の統治から解放された以後進められた新しい社会主義の建設と関連して表れた新しい単語や新しい表現、新しい意味を広範に反映するのに力を入れた」ためである(『朝鮮語辞典』、前書き)。もちろん独立以後新しく生成された政治・経済用語は『朝鮮語小辞典』にも反映されていた。

語彙選択において『朝鮮語小辞典』の正当性は、新しい単語に対する措置に表れている。独立の後朝鮮語の語彙構成には顕著な変化があ

った。

8・15独立とともに共和国の北半部での人民民主主義制度の確立と生産力の発展、そして科学、文化、芸術の発展、祖国解放戦争での偉大な勝利、共和国の北半部での社会主義の基礎建設などの一連の歴史的事実は、朝鮮語の語彙構成に顕著な変化を起こした。一連の単語は廃語となり、新しい単語も数多くできた。『朝鮮語小辞典』はこのような状態を正当に反映している。(シン・クヒョン 신구현 1956:105)

したがって『朝鮮語辞典』がこのような態度を取ったのは、『朝鮮語小辞典』を編纂する時に得た経験を生かしたものであるといえる。このような社会主義的用語の果敢な採扱は、百科事典や政治事典などのない当時の状況では避けられないことでもあった。

この辞典の刊行によって北朝鮮では、『朝鮮語小辞典』の時から始まった、「時代性」と「社会性」を強調する意味注釈方式(キム・ハス 김하수 1990:144-5)が完全に定着し、それは以後の辞典にも継承される。すなわち、このように意味を注釈することによって「一つの単語が社会主義社会ではどんな意味を持っているか、資本主義社会(普通『古い社会』または『搾取社会』と表現される)ではどんな意味を表しているかを、区別し説明しよう」(キム・ハス 김하수 1990:145)とする方式が一般化するのである。ここでも我々は北朝鮮の辞典編纂と社会主義社会の建設という彼らの目標の間には深い関連があるという事実を読み取ることができる。²¹

しかし、この辞典は北朝鮮で初めて編纂した大規模な辞典であるが故に、それに伴う問題も少なくなかった。何よりも大きな問題としては、「言語浄化」が盛んに進行中であったという面もあるが、その成果が正しく反映されていなかったという点を挙げなければならないだろう。このような見出し語の選択の問題と関連し、 キム・スギョン 김수경 (1963:54) は、この辞典は古い単語の比重が大きいというのが、この辞典を見る時一般的に感じられる印象であると話しながら、「아계(牙繫)、아구불열(我躬不閱)、포호함포(咆虎陷浦)、혜분란비(蕙焚蘭悲)、출호이자반호이(出乎爾者反乎爾)などを我が朝鮮語の漢字語としてみなすことができるだろうか」という問題を提起し

ている。そのためこの辞典は金日成により「漢字語があまりにも多すぎて、まるで中国の玉篇みたいです」(김일성 1964:404)^{キム・イルソン}という評価を受けたのである。結局これが後に北朝鮮で刊行される『^{ヒョンデチョソンマルサジョン}현대조선말사전 (現代朝鮮語辞典)(第1版)』(1968)や『^{チョソンムンファオサジョン}조선문화어사전 (朝鮮文化語辞典)』(1973)などが極左的な路線に走るようになった一つのきっかけとなったのではないかと思われる。²²

結局朝鮮戦争の後に北朝鮮で行なわれた言語政策は、「朝鮮語を通した社会主義的愛国主義思想を教養」(『朝鮮語文』1958年3号、15ページ)することにより、成功的な戦後復旧のための北朝鮮の努力の一環であったと言うことができるだろう。

4. 結論

4.1 本稿で筆者は、独立直後から『朝鮮語辞典』が刊行される1962年に至るまでの北朝鮮の辞典編纂過程を、言語政策と関連付けながら検討してみた。それは次のように整理することができる。

第一に、北朝鮮で独立直後に辞典編纂に全力を傾けたのは、何よりも民族共通語が確立されていなかったため、それを急ぐ必要があったからだと言える。これはもちろん独立直後から朝鮮戦争が終わる頃まで続いた「反帝・反封建革命」と「社会主義への移行」のための言語面における努力であった。当時この作業を主導していた機関は「朝鮮語文研究会」であったが、そこには植民地時代から朝鮮語学会で主導的な役割をしていた李克魯をはじめ、南側から北側に行った人々も相当数参加していた。それ故に彼らの作業は植民地時代から続けられていた辞典編纂作業の延長線上にあると見ることも不可能ではない。このような彼らの努力は、1949年の末に辞典の原稿を完成し印刷に回附することにより実を結ぶはずだったが、まもなく勃発した朝鮮戦争のため水泡に帰してしまった。

第二に、朝鮮戦争が終わってからは「あらゆるものを戦後人民経済復旧発展のために!」というスローガンでも見られるように、北朝鮮のあらゆる政策は戦後復旧のために邁進するようになる。このような状況では当然辞典編

纂を含む全ての言語政策も戦後の復旧建設のために努めるのも当然であろう。これは大衆を戦後の復旧と建設に参加するように説得し動員するためにはやむを得なかったことであった。ところで、このように大衆を説得し動員するためには、何よりも彼らに分かり易いことばを語彙規範の中に編入する必要があった。「言語浄化事業」はまさにこの目的のために始まったのであった。これとともに社会主義建設に欠かせない政治・経済的用語なども辞典に収録する必要があったが、これは百科事典をはじめ、各分野別事典がない状況では避けられないことであった。そうして戦争が終わった直後の1954年にはまず綴字法を整備し、次いで1956年には『朝鮮語小辞典』を出版することによって、北朝鮮の辞典編纂作業は軌道に乗る。しかしこの辞書は本格的な辞典を編纂する過程で得た一種の中間収穫であり（キム・ハス 김희수 1990:144）、辞典らしい辞典は1960年から1962年わたって編纂された『朝鮮語辞典』の刊行を待たなければならなかった。結局、この辞典は北朝鮮の語彙規範化を一次的に完成したという意味とともに、以後肯定的であれ否定的であれ、北朝鮮で刊行される辞典の継承と克服の対象となるのである。

4.2 本稿は草創期における北朝鮮の言語政策を、辞典編纂を中心として検討することが目的であった。したがって、綴字法や規範文法、その他の言語政策が辞典編纂といかに関連しているかについては深く検討することはできなかった。また現在の北朝鮮の言語政策の核心ともいえるべき、1960年代の中盤以後に本格化した「文化語」についてはほとんど取り扱うことができなかった。そして南北朝鮮の言語政策はお互いを意識しながら進められる場合が少なくないのだが、本稿ではこのような面についての検討は全くなされていない。このような問題も今後一つ一つ明らかにし、北朝鮮の言語政策を総体的に把握することが、今後の我々の課題なのである。

* 本稿の執筆に際してイ・ヨンスク教授および本多創史氏には、日本語の表現をはじめ、いろいろと有益なご指摘をいただいた。深くお礼を申し上げます。

注

- 1 もちろんこれは北朝鮮の内部的事情だけを考えた時の話であり、他の面では当時の韓国社会の言語政策とも深い関連があると思われる。
- 2 これに関するより詳しい議論は 이종석 (2000:24-27) を参照すること。筆者は 김영진 (1999) でこのような態度で北朝鮮文法の形態論の分化と変遷過程を分析したことがある。
- 3 このような態度は比較的客観的な業績においても例外ではない。例えば李秉根 (1990/2000) の「最近印刷された北朝鮮の国語辞典は分断体制の中で生きてきた私たちには非常に大きな衝撃の一つに間違いない。見出し語の配列での大きな差は私たちをめんくらわせるし、また一つの見出し語に付いている語彙の定義 (lexicographic definition) すなわち『意味注釈』や例文は私たちを当惑させる」という言及からも相変わらず冷戦体制の遺物を見ることができる。
- 4 例えば『새국어생활 (新国語生活)』3巻4号 (1993) の「北朝鮮の国語辞典」特集もそうである。
- 5 이종석 (2000:61-62) 参照。これはいわゆる「革命段階」による時期区分であるが、これとは別に、例えば「經濟發展段階」あるいは「朝鮮労働党の党大会」の開催によって区分する方法もある。これに関する詳しい議論は 이종석 (2000: 61-68) を参照すること。
- 6 このような面で我々の注目を引くのは、当時北朝鮮で幅広く行なわれた「文盲退治事業」である。「文盲をなくすことは民族の隆盛繁栄、新しい社会建設の成果的推進と関わる重大な事業であり、全国に散在し職業や年齢、生活環境が異なる数百万の勤労大衆を対象とする非常に困難で複雑な事業である。またそれは文字を知らない人々に自分の国の文字を教える単純な『文化啓蒙事業』でなく帝国主義植民地統治の残滓をなくし、人民を文明の道に導く崇高な革命事業であり、また勤労人民を国の真の主人になるようにし、新しい社会制度の優越性と生活力を誇示する一代政治事業である。」(전혜정 1987:5) という言及に見られるように、当時北朝鮮での「文盲退治事業」は非常に重要な意義を持つ作業であった。しかし、本稿の目的は北朝鮮の言語政策と辞典編纂の関連性を明らかにするためにあるため、これについてはこれ以上の言及は省くことにする。
- 7 以上は編集部 (1949:135-136) を筆者が要約・整理したものである。
- 8 この「朝鮮語新綴字法」は1950年4月には公式に本の形で刊行された (김영진 1994:123) というが、それが全面的に施行された形跡はない。これに関する詳細な議論はコ・ヨンジン (2001) を参照すること。
- 9 리극로 (1950:4) 参照。この文章は朝鮮語文研究会委員長である李克魯の名前

- で発表された文である。
- 10 以下の例は 리만규 (1950) に出ているものの一部を筆者が整理したものである。この他にも 리만규 (1950) には教科書に乗っている様々な訛り、誤った表現、文法に合わないことば、略語、誤った文字、再考する必要があるいくつかの文章などが載せられている。
- 11 강정규 (1991:180) より再引用。
- 12 社会科学院歴史研究所 (1958) 『朝鮮通史 (下)』_ㄱ、468-489ページ参照。本稿では1988年にソウルで再刊行されたものを利用した。
- 13 朝鮮労働党中央委員会党歴史研究所 (1979) 『朝鮮労働党略史 2』_ㄱ、23ページ参照。本稿ではソウルで1989年に再刊行されたものを利用した。
- 14 金順圭 (1991:228) より再引用。
- 15 『朝鮮通史 (下)』464-5ページより再引用。
- 16 이종석 (2000:75) 参照。反面、「戦争で疲弊した人民の生活を向上させることが先であり、そのために消費財供給ができる軽工業を優先的に発展させなければならぬ」という主張も絶えることがなく (이종석 2000:75)、結局これがあの有名な「8月宗派事件」に繋がるのである。
- 17 『朝鮮語文』1959年1号、9ページ参照。これ以降は北朝鮮で刊行された文献の中で筆者の名前が出ていないものは、当該雑誌の巻号およびページのみを記すことにする。
- 18 (引用者注)「クルーショック」とは「活動グループ、サークル」などの意味を持つロシア語の 클루쇼크 に由来する単語で、当時北朝鮮では「소조 (小組)」と共に使われていたようである。1956年に刊行された『朝鮮語小辞典』には「크루쇼크→平早소조」、「平早소조→소조」(小組)となっているが、『朝鮮語辞典』(1962)には「소조」と「크루쇼크」が共に見出し語として載っており、後者を「소조」(小組)と説明している。
- 19 (引用者注)独立直後から北朝鮮の言語政策を主導してきた「朝鮮語文研究会」は1952年12月に科学院が創設されると科学院傘下の「朝鮮語及び朝鮮文学研究所」に改編される。また1956年3月21~22日に行われた科学院常務委員会の決定により研究所の名称を「言語文学研究所」に改称するようになる(『朝鮮語文』1956年3号、編集後記、110ページ)。
- 20 『朝鮮語辞典』の「後期」:「조선말 사전 간행을 끝내면서」(朝鮮語辞典の刊行を終えて) 2-3ページ。
- 21 これ以外にも、この辞典の刊行によって具体化された北朝鮮の辞書の特徴は色々あるが、本稿は北朝鮮の言語政策全般と辞典編纂が持つ意義を検討することが目的であるため、これに関する詳しい議論は省くことにする。
- 22 このような問題は1992年になって『조선말대사전 (朝鮮語大辞典)』の刊行によってはじめて克服される。

参考文献

- 칸·チョング
강정구 (1991) 「한국전쟁과 북한사회주의 건설」(朝鮮戦争と北朝鮮の社会主義建設) 손호철 他 (1991:159-201)。
- 高永根篇 (1989) 『북한의 말과 글』(北朝鮮のことばと文字) ソウル: 乙西文化社。
- 코·ヨン근
고영근 (1994) 「남북 맞춤법의 검토」(南北綴字法の検討) 코·ヨン근 (1994:121-134)。
- 코·ヨン근
고영근 (1994) 『통일 시대의 어문 문제』(統一時代の語文問題) ソウル: 길벗。
- 코·ヨン진
고영진 (1999) 「북한 문법의 형태론의 분화와 변천」(北朝鮮文法の形態論の分化と変遷) 『동방학지』(東方学志) 103、소울: 延世대학교国学研究院。
- 코·ヨン진 (2000) 「北朝鮮의 初期綴字法について」, 『言語文化』 3 - 3。
「공산주의 교양 사업과 언어학자들의 과업」(共産主義教養事業と言語学者の課業) (1959) 『조선어문』(朝鮮語文) 1959年 1号 (소울: 연문사影印本)。
「공화국 창건 10주년을 맞이하는 조선 어문학」(共和国創建10周年を迎える朝鮮의 語文学) (1958) 『조선어문』(朝鮮語文) 1958年 5号 (소울: 연문사 影印本)。
- 과학원 언어 문학 연구소 (科学院言語文学研究所) (1961) , 『조선어 문법 1: 어음론·형태론』(朝鮮語文法 1: 音韻論・形態論) 소울: 塔出版社影印本 (1990)。
- 과학원 역사연구소 (科学院歴史研究所) (1958) 『조선통사: 하』(朝鮮通史: 下) 소울: 일송정 再發刊 (1988)。
- 킬·ヨン진
길용진 (1947) 『한글 맞춤법 통일안 해설』(한글綴字法統一案解説) 平壤: 朝鮮出版社。
- 金敏洙 (1989) 『北韓의 國語研究』, 소울: 一潮閣。
- 킬·스미켄
김수경 (1949) 「문법 편수의 기본 방향과 조선어 신 철자법」(文法編修의 基本方向と朝鮮語新綴字法) 『조선어 연구』(朝鮮語研究) 第1卷第8号 (소울: 圖書出版亦樂影印本)。
- 킬·스미켄
김수경 (1963) 「조선말 사전: 1-6권」(朝鮮語辭典: 1-6卷) 『조선어학』(朝鮮語學) 1963年2号。
- 金順圭 (1991) 「북한의 초기 통일정책: 민주기지노선」(北朝鮮의 初期統一政策: 民主基地路線) 김일평 他 (1991:211-246)。
- 김영환·권승모 篇 (1996) 『주체의 조선어 연구 50 년사』(主体의 朝鮮語研究 50 年史) 平壤: 金日成綜合大學朝鮮語文學部。

- ^{キム・イルソン} 김일성 (金日成) (1949) 「조선림시정부수립을 앞두고二十개조 정강 발표」(朝鮮臨時政府樹立を控えて二十箇条政治綱領発表) 『조국의 통일 독립과 민주화를 위하여-제 1 권』(祖国の統一独立と民主化のために-第1巻) 平壤: 国立人民出版社。
- ^{キム・イルソン} 김일성 (金日成) (1964) 「조선어를 발전시키기 위한 몇가지 문제」(朝鮮語を發展させるためのいくつかの問題) (金敏洙1989:398-405)。
- ^{キム・イルソン} 김일성 (金日成) (1997) 『김일성 전집 16』(金日成全集16) 平壤: 朝鮮労働党出版社。
- 김일평他 (1991) 『북한체제의 수립과정 : 1945-1948』(北朝鮮体制の樹立過程:1945-1948) ソウル: 慶南大学校極東問題研究所。
- ^{キム・ハス} 김하수 (1990) 「북한의 국어정책」(北朝鮮の国語政策) ソウル: 우리교육(我が教育) 1990年9月号。
- 키ム·ハス (2000) 「南北朝鮮의 言語問題」, 三浦信孝·糟谷啓介篇 (2000:351-366) (イ·ヨンスク訳)。
- 都興烈·丁世鉉 (1989) 「資料解説」, 『원 자료로 본 북한: 1945-1988』(原資料で見る北朝鮮:1945-1988) ソウル: 東亜日報社。
- 「력사적인 조선 로동당 제 3 차 당 대회와 조선 어문학도들의 과업」(歴史的な朝鮮労働党第三次党大会と朝鮮の語文学徒の課業) (1956) 『조선어문』(朝鮮語文) 1956年3号 (소울: 연문사 影印本)。
- 로스 킹 (로스·킹) (1993) 「북한의 방언과 사전」(北朝鮮の方言と辞典) 『새국어생활』(新国語生活) 第3卷第4号。
- ^{리·국루} 리국루 (李克魯) (1950) 「1950년을 맞이하면서」(1950年を迎えながら) 『조선어 연구』(朝鮮語研究) 第2卷第1号 (소울: 圖書出版亦樂影印本)。
- ^{리·만규} 리만규 (1950) 「1949년 8월 30일에 발행한 인민학교 제3학년 [국어]를 읽고서」(1949年8月30日に発行した人民学校第3学年『国語』を読んで) 『조선어 연구』(朝鮮語研究) 第2卷第1号 (소울: 圖書出版亦樂影印本)。
- 三浦信孝·糟谷啓介篇 (2000) 『言語帝國主義とは何か』, 東京: 藤原書店。
- ^{박·금자} 박금자 (1989) 「북한의 국어 사전 평설」(北朝鮮の国語辞典評説) 高永根篇 (1989:173-196)。
- 朴良圭他 (1993) 「북한 국어 사전에 관한 국제 학술회의 토론회」(北朝鮮国語辞典に関する国際学会議討論会) 『새국어생활』(新国語生活) 第3卷第4号。
- 박제수 (1999) 『조선민주주의인민공화국의 언어학에 대한 연구』(朝鮮民主主義人民共和國の言語学に関する研究) 平壤: 社会科学出版社。
- 사전 연구실 (辞典研究室) (1958) 「공화국 창건 10주년을 맞이하는 조선어 사전 편찬 사업의 전망」(共和國創建10周年を迎える朝鮮語辞典編纂事業の展望) 『조선어문』(朝鮮語文) 1958年5号 (소울: 연문사 影印本)。

- 사회과학원 언어학연구소 (社会科学院言語学研究所) (1973) 『조선문화어사전』
 (朝鮮文化語辞典) 平壤 : 社会科学出版社。
- 손호철 他 (1991) 『한국전쟁과 남북한 사회의 구조적 변화』 (朝鮮戦争と南北朝
 鮮社会の構造的変化) ソウル:慶南大学校極東問題研究所。
- 송서룡 (1957) 「소베트 언어학과 해방 이후 조선 언어학 발전에 준 그의 영향」
 (ソビエト言語学と独立以後朝鮮言語学の発展に与えたその影響) 『조선어문』
 (朝鮮語文) 1957년 6호 (소울: 연문사 影印本)。
- 신구현 (1949) 「조선 어문의 통일과 발전 사업에 있어서 우리들 조선 어문 학자
 들의 당면 과업」 (朝鮮語文の統一と発展事業において我々朝鮮語文学者らの当
 面課業) 『조선어 연구』 (朝鮮語研究) 第 1 卷第 8 号 (소울 : 圖書出版亦樂影
 印本)。
- 신구현 (1956) 「조선어 소사전」 (朝鮮語小辞典) 『조선어문』 (朝鮮語文)
 1956년 3 号 (소울: 연문사 影印本)。
- 안중천 (1996) 「사전편찬연구사」 (辞典編纂研究史)、김영황·권승모 篇
 (1996:276-310)。
- 「어문학 연구 사업의 혁신을 위하여」 (語文学研究事業の革新のために
) (1958) 『조선어문』 (朝鮮語文) 1958년 6 号 (소울: 연문사 影印本)。
- 「어문학계 소식」 (語文学界便り) (1957) 『조선어문』 (朝鮮語文) 1957년 2 号
 (소울: 연문사 影印本)。
- 「어문학계 소식」 (語文学界便り) (1958) 『조선어문』 (朝鮮語文) 1958년 2 号
 (소울: 연문사 影印本)。
- 「우리 당의 과학 정책에 보다 충실한 조선 언어학을 위하여」 (我が党の科学政策に
 より充実した朝鮮言語学のために) (1958) 『조선어문』 (朝鮮語文) 1958년 3
 号 (소울: 연문사 影印本)。
- 「위대한 사회주의 10월 혁명과 조선 어문학」 (偉大な社会主義10月革命と朝鮮語
 文学) (1957) 『조선어문』 (朝鮮語文) 1957년 6 号 (소울: 연문사 影印本)。
- 李秉根 (1990/2000) 「북한의 국어사전과 사전학」 (北朝鮮の国語辞典と辞典学)
 李秉根 (2000:226-268)。
- 李秉根 (2000) 『한국어 사전의 역사와 방향』 (韓國語辞典の歴史と方向) 소울:
 太学社。
- 이중식 (2000) 『새로 쓴 현대 북한의 이해』 (新しく書いた現代北朝鮮の理解)
 소울:歴史批評社。
- 任洪彬 (1993) 「북한 사전의 뜻풀이」 (北朝鮮辞典の意味注釈) 『새국어생활』
 (新国語生活) 第 3 卷第 4 号。
- 전혜정 (1987) 『문맹퇴치경험』 (文盲退治経験) 平壤:社会科学出版社。
- 조선로동당 중앙위원회 당력사연구소 (朝鮮労働党中央委員会党歴史研究所)

- (1979) 『조선로동당략사2』(朝鮮労働党略史2) ソウル: 돌베개 再発刊(1989)
- 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 언어 문학 연구소 사전 연구실 (朝鮮民主主義人民共和國科學院言語文學研究所辭典研究室)(1962) 『조선말 사전』(朝鮮語辭典) 東京: 학우書房翻刻發行(1968)
- 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 조선어 및 조선 문학 연구소 (朝鮮民主主義人民共和國科學院朝鮮語及び朝鮮文學研究所)(1956) 『조선어 소사전』(朝鮮語小辭典) 平壤:朝鮮民主主義人民共和國科學院。
- 朝鮮語文研究会(1949) 『朝鮮語文法』 平壤:文化出版社。
- 조선민주주의 인민공화국 과학원 (朝鮮民主主義人民共和國科學院)(1954) 『조선어 철자법』(朝鮮語綴字法) ソウル: 圖書出版亦樂影印本。
- 조선어문연구회 전문연구위원 일동 (朝鮮語文研究会專門研究委員一同)(1949) 「김 일성 장군에게 드리는 편지」(金日成將軍に差し上げる手紙) 『조선어 연구』(朝鮮語研究)第1卷第8号(ソウル: 圖書出版亦樂影印本)。
- 조재수 (1986) 『북한의 말과 글- 사전 편찬을 중심으로』(北朝鮮のことばと文字-辭典編纂を中心に) ソウル:ハン글学会。
- 편집부 (編集部)(1949) 「조선 어문 연구회의 사업전망」(朝鮮語文研究会の事業展望) 『조선어 연구』(朝鮮語研究)第1卷第1号(ソウル: 圖書出版亦樂影印本)。
- 한글학회 50돌 기념사업회 편 (ハン글学会50周年記念事業会篇)(1971) 『한글학회 50년사』(ハン글学会50年史) ソウル:ハン글学会。
- 한글학회 편 (ハン글学会篇)(1989) 『한글 맞춤법 통일안 : 1933-1980』(ハン글綴字法統一案: 1933-1980) ソウル:ハン글学会。
- 한글학회 (ハン글学会)(1947-1957) 『큰사전:1-6』(大辭典:1-6) ソウル:乙酉文化社。

초창기 북한의 언어정책과 사전 편찬

- Language Planning and The Dictionary of North Korea during the 1945-1962 Period -

고영진 (Ko, Young Chin)

이 글은 해방 직후인 1945년 8월부터 《조선말 사전》이 완간된 1962년에 이르기까지 북한에서 행해진 언어정책을 개관하면서, 그것과 사전 편찬은 어떻게 관련이 되는지, 그리고 그것이 가지는 의의는 무엇인지를 검토해 보려는 의도에서 씌어졌다. 우리가 특히 초창기 북한의 언어정책을 검토해 보려는 것은, 무엇보다도 당시 북한에서 행해진 여러 가지 시도들이 오늘날 북한 언어정책의 기반을 이룬다고 보기 때문이다.

북한에서 행해진 언어정책은 개괄적으로 보아 ‘문맹 퇴치 → 한자 폐지 → 철자법 정비 → 규범 문법 및 사전의 편찬 → 문화어의 확립’ 등으로 이어져 온 것으로 파악된다. 물론 이러한 정책들은 하나하나가 개별적으로 이루어졌다기보다는 어느 부분에서는 서로 겹치면서, 또 어느 부분에서는 하나의 정책적 완결이 다른 정책을 불러 일으켰다는 점에서 서로 깊은 관련을 가지고 이루어졌다고 보아야 한다. 예컨대, 한자 폐지는 문맹 퇴치의 결과 새롭게 읽고쓰기를 익힌 사람들을 염두에 넣지 않고서는 생각하기 힘든 부분이다. 또한 ‘문화어’만 해도 한자를 폐지한 결과 생겨나는 무수히 많은 동음이의어를 비롯하여 언뜻 이해가 가지 않는 어려운 한자어들을 염두에 두지 않고서는 이해하기 어려운 일이다. 그렇기 때문에 초창기 북한에서 행해진 언어정책과 사전 편찬 과정을 검토해 보는 것은, 오늘날 북한의 언어정책의 연원을 찾는 것일 뿐만 아니라, 그 자체가 가지는 의의도 대단히 크다.

이와 관련하여 먼저 생각해 보아야 하는 것은, 북한을 연구하는 경우에 어떠한 태도로 거기에 접근하는가 하는 문제이다. 이 글에서는 특히

북한과 같은 사회주의 사회의 경우에는 이른바 ‘내재적·비판적 방법’, 즉 연구 대상이 되는 사회나 집단의 내재적 작동 논리를 먼저 이해한 뒤에, 그것의 현실정합성과 이론·실천적 특질, 나아가서는 한계까지도 규명해 내어야 한다는 태도를 취했다. 그렇지 않았을 경우에는 북한에 대한 맹목적인 비난으로 떨어질 가능성이 대단히 크기 때문이다.

이와 같은 관점에서, 초창기 북한에서 간행된 언어 사전들은 어떠한 의도에서, 어떠한 목적을 가지고 편찬되었는지, 그리고 그것들은 북한의 언어정책과 어떠한 관련을 가지고 있는지를 검토해 보았는데, 그것은 다음과 같이 정리할 수 있을 것이다.

첫째로, 북한에서 해방 직후에 사전 편찬에 힘을 기울였던 것은 무엇보다도 민족 공통어가 확립되어 있지 않았기 때문에 그것을 확립하기 위한 노력에서 시작된 것이었다. 이것은 물론 해방 직후에서 한국전쟁이 끝나는 무렵까지 계속된 이른바 ‘반제·반봉건혁명’과 ‘사회주의로의 이행’을 위한 언어적 노력이었다. 당시 이 작업을 주도한 기관은 ‘조선어문연구회’였는데, 여기에는 식민지 시기부터 조선어학회에서 주도적인 역할을 했던 이극로를 비롯하여, 남한에서 넘어간 사람들도 상당수 있었다. 그렇기 때문에 그들의 작업은 식민지 시대부터 있었던 사전 편찬 작업의 연장선 위에 있는 것이었다고도 볼 여지가 많은 것이었다. 이러한 그들의 노력은 1949년 말에 사전 원고를 완성하여 인쇄에 회부함으로써 빛을 보는 듯했으나, 곧 이어 발발한 한국전쟁으로 말미암아 수포로 돌아가고 말았다.

둘째로, 한국전쟁이 끝난 후에는 ‘모든 것을 전후 인민경제 복구 발전을 위하여!’라는 그들의 구호가 보여 주는 바와 같이, 북한의 모든 정책은 전후 복구를 위하여 매진하게 된다. 이러한 상황에서는 당연히 사전 편찬을 포함한 언어정책도 전후의 복구건설을 위한 것이 될 수밖에 없었는데, 이것은 대중들을 전후의 복구와 건설에 동참하도록 교육하고, 설득하고, 동원하기 위한 것이었다. 그런데, 이처럼 대중들을 교육하고,

설득하고, 동원하기 위해서는 무엇보다도 그들이 알아들을 수 있는 말을 어휘 규범 안에 편입할 필요가 있었다. ‘언어정화사업’은 바로 이 때문에 시작된 것이었다. 이와 더불어 사회주의 전설에 필수적인 정치·경제적 용어들도 사전에 수록할 필요가 있었는데, 이것은 백과사전을 비롯한 각 분야별 사전이 편찬되어 있지 않은 상황에서는 불가피한 일이기도 했다.

그리하여 전쟁이 끝난 직후인 1954년에는 우선 철자법을 정비하고, 이어서 1956년에는 《조선어 소사전》을 편찬함으로써 북한의 사전 편찬은 본 궤도에 오르게 된다. 그러나 이것은 본격적인 사전을 편찬하는 과정에서 얻은 일종의 중간 수확이었고, 사전다운 사전은 1960년에서 1962년에 걸쳐서 6권으로 편찬·간행된 《조선말 사전》이 나오는 것을 기다리지 않으면 안되었다. 결국, 이 《조선말 사전》은 북한의 어휘 규범화를 일차적으로 완성했다는 의미와 더불어, 이후 긍정적이든 부정적이든 간에, 북한에서 나오는 사전들에서 계승과 극복의 대상이 되었다는 의미에서도 그 중요성은 더욱 크다고 할 것이다.

Key words: Language Planning, Dictionary, National Language, Post-Korean War
Reconstruction of North Korea